

## 「弱み」も「強み」もチームの力

社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿

長谷川 裕和、田中 勇貴、中安 大輔

(多様性 チームケア)

### 1. 目的

小規模多機能ホーム三宿という介護の現場において、多様性を認め合う共生社会を考えてみたとき、私たちは、どんな取り組みや受け入れ、認識をしているのだろうか。共に働く職員のことを、どのように考えているのか、介護職員の目線で検討することを目的とした。

### 2. 実践内容

- (1) 若者就労サポートステーションから、就労体験実習に参加した職員を中心に、聞き取りを行った。内容としては、多様な条件を持っている職員同士が、どのように認め合い、協力して介護の仕事を行っているのか、職員は、なぜ、この職場で社会とつながり、仕事を継続することができたのかを職員と一緒にテーマに沿って考えることとした。
- (2) 多様性のある社会を考えたときに、職員だけでなく、利用者の支援にも同様に多様性を認めることが必要ではないかと考え、ケアの内容を振り返ることとした。

### 3. 結果

多様性という言葉について、条件や特性、人生の過程などを知り、社会の中で、まずは認め合う、「弱み」も「強み」もその方の持っている条件だということを改めて学んだ。この実践を行う中で、若年就労サポートステーションからの就労体験を受け入れることの意義と自分たちは多様性があふれる社会で生きているということ、それを認め合わずして、利用者の支援を共に行うことはできないのではないかと感じた。職員の様々な力をお互いに発揮できるようにすることは、互いを知り、個人を認め、協力していくことが重要だと考えた。

### 4. 考察と今後の課題

互いに働く職員のことの特性や条件を知ることだけでなく、認めることがチームにとって最大の強みになると考えた。できないことを批判するのではなく、できないことの原因や要因と一緒に考え、出来るようにしていくことや、それでも難しい時には、別の職務や役割を持ってもらい、力を発揮してもらうことで、その人が生き生きと活躍できる。それこそがチーム力の向上につながると考えた。今後の課題は、多様性を認め合うことが当たり前の職場にしていけること、色々な個性や条件があり、『それがいい!』と、考えられる職員集団にしていき、利用者の支援についても、個の力を認め、利用者の生活をそれぞれに支えていくことを改めて検討していく必要があると考えた。

